
ディアボロス

小沢新都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディアボロス

【Zコード】

N7675T

【作者名】

小沢出新都

【あらすじ】

更新停止してるので、なんか思いついたままに書き上げてしまつた。
待ってくださっている方すいません。

宇宙は暗くて広くて、星は光っているけどそれはずっと遠くにあって、僕のところには届いてこない。

ほとんど何もない空間に、僕は生まれてからずっと一人ぼっちだった。

ずっとずっと…。気が遠くなるような永い間。

寂しい…。

ずっと生まれたときから孤独だったはずなのに、不思議と心はそう思ってしまう。

* * *

梓がそれを見つけたのは、8歳の誕生日を迎えた夜だった。

お祝いのケーキを食べて、お父さんとお母さんからもったプレゼントのぬいぐるみを抱きしめて眠りこいつとした梓は、ふと、その気配に気づいた。

自分から遙かに遠い場所にいるそれが、悲しそうにしてることで、あずさは不思議に思い話しかけた。

「ねえ、あなた何してるの？」

* * *

声は、突然聞こえてきた。見えるのは相変わらず暗い闇と、ただと光続ける星だけなの。高く元気な声が僕の耳に確かに聞こえてきた。

「どうしたの？きょろきょろして。」

「氣のせいかと思つても、声はまた響いてきて僕は目を見開いた。

「な…なに？」

声を出したのなんてはじめてだった。でもそれは相手にちやんと届いたようだつた。

「なこつて…。うーん、なんだろう。」

それと同時に首を傾げる氣配が伝わっていく。

「だ…だれなの…？」

僕のまわりには何も存在しないのに、話しかけてくるのは誰？

「んつ、わたしはあずさ。小学校三年生なの。あなたは？」

「こうじと笑う氣配が伝わっていく。

「ほ、ほへほ…。」

返事を返そうとして、言葉につまむ。だって僕この前はない。

「むつ、名前、教えてくれないの？」

「ちつ、ちがつよ。僕こは名前がないから。」

慌てて正直に話してしまった僕に、返ってきたのは驚きの気配。

「えーっ…名前がないの?..」

「ひ、うん。」

僕がしょんぼりしたのがちがつたのか、あすかといふ子の気配に申し訳なさが混じる。

「ちつなんだ…。ちつだ…じゃあ、私が名前をつけてあげるー。」

「えつ…?」

僕に名前をつける?

その言葉に僕の胸はときめいた。名前、だってそれは孤独じゅうい証。誰かが僕と共にいる証。

「ちつ、ユーノなんてどう?..」

「…ちつ…」

一つ返事でそれを受け入れようとした僕を、あすかの声が遮った。

「まつて、もつと良い名前があるかもー」

「べつに僕はユーノでいいんだけど…。」

「だつてせつからく付ける名前なんだもん。もつといいのを付けるの！」

あずさはそう断言してしまつ。そう言われると僕は何も言えない。

「今日は遅いからまた明日ね。それまでいい名前考えておくから。」

また明日、その言葉に僕の鼓動は高くはねた。

よくわからない、突然の出会い。また明日であるなんて保証はない。でも、僕は会いたいと祈った。

「またね。」

「うん、またね。」

そういうて手を振るあずさに、僕はそう返事した。

* * *

「クロウ・ラーナ・シナモン！」

「うん、どれもいいね。」

あずさとはまた会えた。それは生まれてからずっと独りだった僕に起きた奇跡だった。

あずさの並べた名前はどれもかがやいてる気がして、僕は笑顔で

頷く。

「「フーん、やつぱりダメーもつといーのがありだー。」

今日も僕の名前は決まらなかつた。それを残念に思いながらも、僕の心は嬉しさで満たされている。

あの田から、僕は毎日あずさと会つて話してた。あずさは会つたびにたくさんの名前を考えてくれてる。

僕はそのどれもが良くて頷くけど、あずさはまだ納得がいかないらしい。

はやく名前が欲しいといつ気持ちもあるけど、あずさがあのやりとりもとても楽しい時間。

「それでね。今日は学校に迷い猫が来たの。クラス中が大騒ぎー。」

「猫…? ねこってなに…?」

「ねこっていうのはねえ。耳があつて、尻尾がね」

僕の名前以外にも、あずさはたくさんの話をしてくれた。学校、家族、友達、ひとりではない、たくさんの人人がいる世界。

そんな話を聞くたび、僕はあずさのいる世界を想像して、心が温かくなつた。

* * *

「ねえ、明日はね、私の誕生日なの。友達を呼んで誕生パーティーを開くの。」

あずさがその友達と出合ってから、一年のときが経っていた。

今夜も友達と話していたあずさは、楽しそうに笑つてそう告げた。

「へえ、楽しそうだね。」

相手からも云わつてくる楽しげな気配に、あずさも胸を踊らせた。

「うん、それでね、あなたも来てほしいの。」

毎晩話す不思議なあずさの友達。あずさはなんとなくこの友達が遠いところにいるとわかっていた。

そしてずっと独りで寂しい想いをしていたことも。

「その日ね。とつておきのプレゼントがあるの。」

「プレゼント……？」

「そう、あなたに。」

今日、あずさが選んだ名前をその声に披露することは無かつた。

だつてつこに想いついたのだ。この友達にぴったりの名前を。

そして明日が自分の誕生日だと気が付いた。それはきっと運命だと思つた。

明日、自分の誕生日と一緒に、この友達に名前をプレゼントする。
いつもあずさの話をきこてくれる、やびしがりでちょっと弱氣な、
とっても優しいあずさの親友。

大切なその名前は、忘れないようにしておきのメモ帳に書いて
ポケットの中にしまつてある。

「えへへ、楽しみだなあ。喜んでくれるかな。」

あずさはもう笑つて、いつもの会話を終えるとベッドの中で眠り
についた。

* * *

じつじつ……。

僕は迷つていた。あずさの誕生日に呼ばれたことを。

あずさのいる世界は遠くにあるナビ、僕はその場所にいくことは
できるかと思つ。

初めて出会えた友達がいる世界。

あずさがいつも話してくれた光り輝く世界。あたたかな世界。

触れてみたい。そう思つた。その温もり。

あずさと一緒に場所についてみたい。

あの暖かさに一瞬だけでも触れて見たくて……。

宇宙と同じ色の黒い翼をはためかせ、僕はあずやのこる世界へ手を伸ばした。

大

私の9歳の誕生日。

た。その日、黒い死神が空から降りてきて、私の世界を粉々に滅ぼし

六

「うわああああああああああああー。」

光、緑、青、やさしい色にあふれた世界。

あずさが住んでいた、あずさが僕に教えてくれた美しい世界。

それは僕が手を触れた瞬間、粉々に砕け散った。

ぶちぶちぶち

あざとと同じ命たちが消えていく音が僕の耳に響く。

碎けた岩石に押し潰され、宇宙の闇の中で破裂し、粉々に碎けた

大地から飛び散った溶岩に焼かれて。

数えきれない命が一瞬で滅びた。

僕が、触れたせいで。

「あずさー・あずさー・

必死にたぐり寄せた気配の糸、僕の力であずさを救えたのは奇跡かもしけない。

だつて僕の力に触れるたびに、残つたわずかな命もぱらぱらに切り裂かれ散つて行つたから。

あずさの住んでいた世界

僕が滅ぼした世界。

僕はたくさん命が消えた残響を聞きながら、意識の無いあずさを別の世界へと運んだ。

* * *

私の世界を滅ぼした黒い魔魔。

優しいお母さん、ちょっと情けないお父さん、最近生意氣になつてきただけどやつぱり可愛い妹、いつも遊んでいた友達、厳しいけどちゃんと優しい先生、すべて殺された。

学校も、家も、遊園地も、街もすべて破壊された。

禍々しい黒い翼をもつ化け物によって。

私はその化け物に名前を付けた、いつかこの手で殺すために。

ディアボロスと。

ひとり生き延びた少女は新たなる世界で力を得るため日々を過ごした。

自分の故郷を滅ぼした化け物に復讐するために。

あのディアボロスを殺す。

滅ぼされた彼女の星のように、その命をぐしゃぐしゃに破壊する。

彼女が新たに運ばれた世界は、平和な場所だった。

その世界の住人はディアボロスの存在を聞き、彼女がそれを倒す力を得るために協力してくれた。

それに生き延びた彼女には特別な加護があった。

彼女を守り、力を与えてくれる不思議な力。

それは彼女に語りかける声とともにあった。

「今まで、ありがとうね。」

その日の夜、あずやな声に語りかけた。

「ううん…。」

あずやなついたライアボロスを殺せるだけの力を得た。長かった長い時間だった。

「どうしたの、元気がないよ？」

その間、あずやな支えてくれたのは、8歳の誕生日に出来た声だけの友人。

ひとりになってしまった自分を、悲しみと恐怖に震えていた自分を慰めてくれた声。

厳しい修行に心が折れかけたとき、励ましてくれた声。

この友達のおかげで、自分はもう一度復讐^{復讐}を果たすことができるのだ。それは明日。

「ううん、なんでもないよ。」

「むう、隠し事？」

あずやの機嫌を損ねた声に、声は荒れて答える。

「そ、そういうやなこよ。いや、そういうやなかも…。」

優しいあずさの友達は、落ち込んだような気配を伝える。

「僕ね、明日からしばらく遠いところへ行かなきゃいけない。」

「遠いところ?」

「うそ。」

「遠いところ…。今よりも遠いところ?」

あずさの優しい友達の姿を見たことが無かつた。それでも声が伝わるとき、気配で遠いところになると分かっていた。

それよりも、遠くへ行く…。

「うん、君の声も聞かないところ…。だからもう話せない。」

「えつ…。」

あずさの言葉に驚いた。だつてこの友達はまつとそばにいてくれたのだ。あずさがすべてを失つてからずっとずっとまばらにいた。

だからになくなることなんて考えられなかつた。

「帰つてくんだよね…。」

声は長く沈黙して、答えを返してくれなかつた。

あずさはそれに不安を覚えたが、何も言えなかつた。ただ、友達

が帰つてくることを信じるしかなかつた。

新しい世界の人たちは優しいけど、それでも元いた世界から一緒にいてくれたのはこの友達だけなのだから。

まずは明日、ディアボロスを殺す。

そのために力を得たのだ。

「奴の左の胸の水晶を突けばディアボロスを殺せるんだよね。」

「うん。 そうだよ。」

それにこの友達は、故郷を滅ぼした悪魔、ディアボロスの弱点も教えてくれた。どうやってそれを知ったのかはわからない。でも、何故かそれは信じられた。

なんとなく思うのだ。ディアボロスに世界を破壊されたあの時、自分を助けてくれたのはこの友達ではないのかと。

「ねえ、ディアボロスを殺したら、あの日考えたあなたの名前を思い出すためがんばるから。絶対、思い出すから。」

誕生日の日、考えていた名前はあの時のショックで忘れてしまつた。

メモもどこかへといつてしまつた。

だから長い時間がたつた今も、この友達に名前をつけてあげられないでいる。

ディアボロスを殺して、全てが終わつたら、あの日考えた名前を思い出すのだ。そして、最高の名前をこの友達にプレゼントする。

「だから…、必ず帰つてきて。」

「…、大丈夫だよ…。」

その答えの意味を、その時、私はわからなかつた。

* * *

あつけなかつた。

あずさの突き出した巨大な槍は、ディアボロスの胸を貫いた。

あずさのいた世界を滅ぼした恐ろしい化け物は、あつけなく倒れ伏した。

「やつた…、やつた…。」

あずさは自分が殺した悪魔の姿をこの目で見る。あの日も見た、黒い羽根と恐ろしい巨体を持った化け物。でも今はもうその身は力を失い、体を闇の空間に横たえている。

抵抗らしい抵抗はなかつた。でもそれもどうでも良かつた。こいつを殺せたのだから。

ついに復讐をとげたのだ。奪われたたくさんの命のために。力を貸してくれたいろんな人たちのために。そして誰よりも自分を支え

てくれた友達のために。

「ねえ、やつたよー！」

あずさはいつものように元気な友達に呼び掛けようとじっとしていた。

呼び掛けた友達は今は遠ことひいて、声は届かない。

そのはずなのに…。

あずさの手は捕えた、『ディアボロスの翼』にひつかつた一枚の紙切れ、そこに書かれているのは、9歳の誕生日に自分が書いたはずの文字。

「あれ…なんで…、なんで…？」

喉から震える声が漏れる。

何故、化け物の体にあのメモがあるのか。

そして復讐を願った化け物から感じたわずかな気配、もう消えかかっているその気配は、自分の親友の…。

「なんで…！なんでなのー！」

その体にすがりついたあずさを、ディアボロスは最後の力を振り絞った薄刃を開けて見た。

そして呟いた。

「「」あんね…。」

その赤い瞳から涙が伝づ。

それを最後に目を閉じた。

「そんな…、なんで教えてくれなかつたの…、なんで言つてくれなかつたの…。なんで秘密にしたまま逝こつとしてたの…。」

声が震えて、目から涙が溢れ出す。

その手はもう動かない友達の亡骸に必死でしがみつぐ。

「違うよ、あなたの名前はティアボロスじゃない。そんなんじゃないんだから！」

「嫌だよ。死んじやうなんて。ずっと一緒にいたの。やつと本当に会えたのに。素敵な名前だつてあざられたの。」

「こやだよ…。」「んなの…。」

あすかの嗚咽は、こつまでも悲しい声でだまし続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675t/>

ディアボロス

2011年6月5日05時07分発行